

日々の想



ざんそう

M男とともに

秋元澄江



ここに、数冊のファイルがある。

これは、私の宝物、家庭との連絡帳。

M男との一ページを開いてみる。

◇七月四日 一校時

M男、夢中になって、粘土で好きな動物づくりに取り組む。

「でえきたできた。きりんさんができた。校長先生に見てもらおう。」

「M君、上手にできたねえ。このき

りんさんは、お腹が空いても大きな声で泣いたりしないよ。」

「校長先生、このきりんさんはね、動かないからお腹は空かないの。」

「ワッハッハ、そうか。M君に一本とられたよ。まいった!。」

M男——知恵遅れではないが、脳梁欠損症と診断された子であった。

一年生の六月から入級する。入級当時、M男は腹時計に合わせて給食を催促し、おばさん達を慌てさせた。

我慢することができないで、大声で泣き喚くのが日課となっていた。特に、米飯が大好きで、おかわりは、校長先生によそってもらうことを楽しみにのびとつにしていた。

◇九月十日 雨の日

仕事休みの祖父が教室に姿を見せる。手元には、買ったての雨靴が。

一瞬、母親の言葉がよぎる。

「M男の事になると、じいちゃんは目の色が変わるんですよね。」

M男の祖父は、農作業の合間に、上手に植木類の手入れをするほど働き者である。酒で疲れを癒す事も多い。そんな時、M男は祖父の仕事着を脱がしてあげ、寝床まで抱きかかえるようにして横にさせ、一緒に寝ることにしているそうである。

「Mはめんこい。先生、頼むかんない。」

視点をかえるという言葉があるが、いつの間にか、私は、元気で天真爛漫なM男が大好きになり、M男の豊かな感性からほとぼしるやさしさに心打たれ、失いかけていたものに気づかされ、教えられることが多くなっていた。

◇二月八日 初雪の日

一校時終了のチャイムと同時にM男が登校。

「先生、雪のおにぎり、作ってきたあげたよ。」

両方のポケットから、握りしめていた両手をそと出して、大事そうにゆっくり指を開いていった。真っ赤な手の平に、ちよこんと顔を出した雪のおにぎりが、眩しい程に輝いて見えた。

君とわれ、共に腕くみ

君とわれ、俱に学びて

聞こえてくる植田小学校の校歌を

口ずさみながら、学級園のいちごの

白い花々を眺めてみる。散つてゆく花の横に開きかけた蕾があり、枯れた花のあとにはいくつもの実が残され、やがて育っていく。ともに生きるという事は、何と、ひと枝の花に似ていることでしょうか。

校長先生や祖父の温かい心は、いつまでも、M男の胸に深く刻みこまれて残り、静かに、M男の生きる力となっていくものと信じている。

私達の役割は、子ども達を預かって育てていくことにある。でも、私には、子どもを、固定的、一面的でなしに、柔軟に、まるごととらえる大らかさを持ち合わせているだろうか。そして、時に、障害ゆえの遅れを、天性のユーモアととらえ得る、心の幅を持ち合わせているだろうか。「でも、この子には、こんないいところがあります。こんな可能性がありません。」と、わずかな能力や可能性があつても、それを見いだす努力の姿勢と感受性、そして、親の痛みに共感する、みずみずしい心が、失せていないだろうかと自省するとしきりである。

植田小学校の子とも達との出会いを機に、自分を見つめ直しているこの頃である。

(いわき市立植田小学校教諭)